

主日礼拝説教「あなたが語らなければ…」

日本基督教団石神井教会 2018年6月3日

【使徒書日課】使徒言行録 4章13～31節

¹³議員や他の者たちは、ペトロとヨハネの大胆な態度を見、しかも二人が無学な普通の人であることを知って驚き、また、イエスと一緒にいた者であるということも分かった。¹⁴しかし、足をいやしていただいた人がそばに立っているのを見ては、ひと言も言い返せなかった。¹⁵そこで、二人に議場を去るよう命じてから、相談して、¹⁶言った。「あの者たちをどうしたらよいだろう。彼らが行った目覚まししいるしは、エルサレムに住むすべての人に知れ渡っており、それを否定することはできない。¹⁷しかし、このことがこれ以上民衆の間に広まらないように、今後あの名によってだれにも話すなど脅しておこう。」¹⁸そして、二人を呼び戻し、決してイエスの名によって話したり、教えたりしないようにと命令した。¹⁹しかし、ペトロとヨハネは答えた。「神に従わないであなたがたに従うことが、神の前に正しいかどうか、考えてください。²⁰わたしたちは、見たことや聞いたことを話さないではいられないのです。」²¹議員や他の者たちは、二人を更に脅してから釈放した。皆の者がこの出来事について神を賛美していたので、民衆を恐れて、どう処罰してよいか分からなかったからである。²²このしるしによっていやしていただいた人は、四十歳を過ぎていた。

²³さて二人は、釈放されると仲間のところへ行き、祭司長たちや長老たちの言ったことを残らず話した。²⁴これを聞いた人たちは心を一つにし、神に向かって声をあげて言った。「主よ、あなたは天と地と海と、そして、そこにあるすべてのものを造られた方です。²⁵あなたの僕であり、また、わたしたちの父であるダビデの口を通し、あなたは聖霊によってこうお告げになりました。

『なぜ、異邦人は騒ぎ立ち、諸国の民はむなしいことを企てるのか。』

²⁶地上の王たちはこぞって立ち上がり、指導者たちは団結して、

主とそのメシアに逆らう。』

²⁷事実、この都でヘロデとポンティオ・ピラトは、異邦人やイスラエルの民と一緒にあって、あなたが油を注がれた聖なる僕イエスに逆らいました。²⁸そして、実現するようにと御手と御心によってあらかじめ定められていたことを、すべて行ったのです。²⁹主よ、今こそ彼らの脅しに目を留め、あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語るができるようにしてください。³⁰どうか、御手を伸ばし聖なる僕イエスの名によって、病気がいやされ、しるしと不思議な業が行われるようにしてください。」³¹祈りが終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動き、皆、聖霊に満たされて、大胆に神の言葉を語りだした。

【福音書日課】マルコによる福音書 1章29～39節

²⁹すぐに、一行は会堂を出て、シモンとアンデレの家に行った。ヤコブとヨハネも一緒であった。³⁰シモンのしゅうとめが熱を出して寝ていたので、人々は早速、彼女のことをイエスに話した。³¹イエスがそばに行き、手を取って起こされると、熱は去り、彼女は一同をもてなした。³²夕方になって日が沈むと、人々は、病人や悪霊に取りつかれた者を皆、イエスのもとに連れて来た。³³町中の人々が、戸口に集まった。³⁴イエスは、いろいろな病気にかかっている大勢の人たちをいやし、また、多くの悪霊を追い出して、悪霊にものを言うことをお許しにならなかった。悪霊はイエスを知っていたからである。

³⁵朝早くまだ暗いうちに、イエスは起きて、人里離れた所へ出て行き、そこで祈っておられた。³⁶シモンとその仲間はイエスの後を追い、³⁷見つけると、「みんなが捜しています」と言った。³⁸イエスは言われた。「近くのほかの町や村へ行こう。そこでも、わたしは宣教する。そのためにわたしは出て来たのである。」³⁹そして、ガリラヤ中の会堂に行き、宣教し、悪霊を追い出された。

祈り、宣教し、いやす

聖壇の掛布は、ペンテコステ（聖霊降臨日）の「赤」、三位一体主日の「白」を経て、今日から「緑」に掛け替えられました。「聖霊降臨節」のおよそ半年間、教会暦の期節を示す色は、「自然色」とされる「緑」です。わたしたち地上に生きる「神に造られたもの」の被造世界を示す色です。「聖霊降臨節」の期節は、わたしたちが、神のお創りくださった世界に目を向けるとき、この世界をお創りくださった神の大いなる御業に大胆に目を向けるとき、と言ってもよいでしょう。

この期節のことを、「教会の半年」と呼ぶことがあります。ペンテコステに聖霊で満たされた弟子たちが「教会」として歩み始め、世界中に広がっていった、そのさまを辿りながら、その歴史の末端に連なるわたしたち現代に生きる教会の歩み方を見直し、問い直す。「教会の半年」は、そのような期節として大切にされてきたのです。

教会は、もちろん、主イエスの弟子たちの集団から始まりました。主イエスに招かれ、その後に従い続けた、十二弟子を中心とした弟子たちの集団です。その弟子たちの集団が、主イエスの十字架とご復活・昇天の後、バラバラに解散してしまうことなく、なお一つの集団として歩み続けました。ペンテコステの出来事が起こったからです。ペンテコステの聖霊が弟子たちの集団に注がれ、「教会」として一つの結びつきを保ちながら、世界中に出て行き、広がっていくことになったのです。この期節に繰り返し開かれる「使徒言行録」は、その初代の「教会」の歩みを、わたしたちに物語ってくれているのです。

彼ら初代教会の弟子たちは、しかしながら、ペンテコステの聖霊に満たされたとき、何か新しいことを閃いて、教会の事業を立ち上げたわけではなかったようです。弟子たちは、自分たちの主であるお方、主イエスがかつて為されたことを、自分たち自身の営みとし始めたのです。

主イエスがかつて為されたことを、今日の福音書・マルコは、端的に語ってくれているようです。主イエスは、第一に、会堂に入って教えられ、神の国の福音を宣教されました。第二に、主イエスは、ご自分のもとに集まってきた人々の病気をいやし、悪霊を追い出されました。そして第三に、主イエスは、宣教の御言葉を語り、また、いやしの御業を為され続けるために、祈られたのです。「祈り、宣教し、いやす」。マルコ福音書は、後に従う弟子たちの見た主イエスのお姿を、そのように描き、語るのです。

使徒言行録の教会は、まさにそのような主イエスの姿に倣おうとした弟子たちの歩みの物語と言うことができるでしょう。今日の箇所が登場するペトロとヨハネは、神殿の境内で出会った足の不自由な男に、「わたしには金や銀はないが、持っている者をあげよう。ナザレの人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい」（3:6）と告げて、彼をいやしたばかりでした。そのいやしの御業を見て驚いた人々は、二人の語る宣教の言葉に耳を傾けました（3:12 以下）。そして、その件で議会の取り調べを受けた二人は、教会の仲間のもとに戻ってくると、心をつにして祈った、というのが今日、語られていたところでした。

大胆に！

祈り、神の御業を語り、いやしの業を行う教会。ペンテコステの聖霊降臨を祝ったわたしたちも、ここに物語られている弟子たちの教会に連なる教会です。祈ること、神の御業を語ること、そして、いやしの御業を行うこと。わたしたちが、弟子たちの教会から受け継いできたこと、いいえ、主イエスから受け継いできたことです。とは言え、わたしたちは、それをどれだけできているかと問われると、少し自信がなくなります。

祈ること。わたしたちは、日曜日ごとに教会に集まり、礼拝にあずかります。礼拝は、何よりも祈ることです。わたしたちは、祈るために集まり、礼拝として整えた儀式を行うのです。あるいは、礼拝のように整えた儀式でなくても、さまざまな集会を行います。わたしたちは、教会の営みはすべて、祈りによって始められ、祈りによって終わられる、と教えられてきました。小さな会議のような営みさえ、祈りによって始め、祈りによって終わるようにと、教えられてきたのです。わたしがかつて神学生として一年間通った大きな教会では、日曜日の教会で、礼拝や集会以外の場でも、至るところで始終、小さな祈りが重ねられていたことを思い出します。そこに牧師や伝道師がいなくても、信徒同士で、子ども同士でさえ、何か共に行うことがあれば、祈りをもって始め、また終わるということが、自然に行われていたのです。そのような教会で訓練を受けたにもかかわらず、わたし自身は、牧師となってからも、教会の営みの中で祈ることを十分にしてきたかと問われると、不安になります。

神の御業を語ることや、いやしの業を行うことは、どうでしょうか。

わたしたちの礼拝は、もちろん、聖書が朗読され、御言葉が説かれ、神の御業の宣教がなされます。聖書を学ぶさまざまな集会を営み、神の御業が宣べられています。あるいは、コンサートなどを行うことの中でも、控えめにはありますが、御業の宣教をしていると言うことができるでしょう。けれども、日々の営みの中で、御業を語ることがどれほどできているかと問われると、どうでしょうか。家族や友人を前にして、わたしたちは、神の御業を語ることの難しさに、日々直面しているのではないのでしょうか。

その意味では、わたしたちはもしかすると、いやしの業を行うことのほうがまだ、積極的に関わると考えているところがあるかもしれません。人を助け、立ち上がらせようと励ます言葉は、何も聖書に限定されるわけではありませんし、キリスト信仰に限定されるわけでもないからです。ただ、そのような営みが、果たして主イエスのなされたいやしの業を受け継ぐものなのか、弟子たちの教会が取り組んだ営みを受け継ぐものなのか。わたしたちは、そのことを十分に問うていないところがあるかもしれません。

今日の使徒言行録は、わたしたちに、一つの問いかけをしています。「大胆に」(13節、31節)そのことを為しているか、と。祈り、宣教し、いやすこと。弟子たちの教会は、それらのことを秘かに、控えめにはなく、「大胆に」行ったというのです。では、あなたたちはそれを「大胆に」行っているか。

揺り動かされ、聖霊に満たされて…

わたしたちは、なかなか「大胆」になれないのです。世の中での営みでは「大胆に」なれるような人でも、信仰に関わることになる、どこかから「控え目」の虫が鳴き始める、ということが少なくないのです。

もちろん、わたしたちは、そのことを否定的に考える必要はないと思います。わたしたちの信仰においても、控えめで、秘かに行われることが大切にされる場面は、少なくないのです。パウロが繰り返し語ったのは、わたしたちがキリストのように謙るべきことでしたが、謙りはおのずと控えめな態度として表されることでもあるでしょう。あるいは、主イエスは、天の父の御心にふさわしい良い業を行うことを強く勧められましたが、そのとき「右の手のすることを左の手に知らせてはならない」（マタイ 6:3）ともお教えになられたのです。そんなことは不可能なようにも思いますが、自分自身に対してさえ秘かに行うという姿勢の意味するところは、分かるように思えます。

それでも、わたしたちは、この使徒言行録に描かれる弟子たちの「大胆な態度」、そして「大胆に神の言葉を語りだした」姿を、見過ごすわけにはいきません。それは、あの使徒たちの教会だから可能だったということなのでしょう。それは、二千年前のあの熱気、主イエスの情熱をまだ肌感覚で知っていた弟子たちの教会の熱気ゆえのものだった、ということなのでしょう。それは、二千年を経、遠く数千キロも離れたところにたどりついた日本の教会には、関係のないことなのでしょう。

ペトロやヨハネは、確かに特別な賜物を与えられていた弟子たちだったのでしょう。けれども、それを言うのならば、現代に生きるキリスト者たちも、皆さん一人ひとりも、間違いなく特別な賜物を与えられた弟子の一人ひとりのはずです。何となれば、わたしたちもまた、ペンテコステを祝った教会なのです。聖霊の注がれた教会なのです。聖霊が一人ひとりの上にとどまり、霊に満たされた互いであることを信じる教会なのです。

ペトロやヨハネは、人々の前で大胆な態度で語りながら、教会の仲間たちのもとに戻ったときに、なお、こう祈りました、「主よ、…あなたの僕たちが、思い切って大胆に御言葉を語るができるようにしてください」。彼らも、祈り求めることなしに大胆に語ることはできなかつたのです。その祈りは、しかも、自分たちが今まで通りの安全なところにとどまろうとする祈りではなかつたのです。彼らが祈り終わると、一同の集まっていた場所が揺れ動きました。彼らが今まで立っていたと思っていた場所は、揺り動かされたのです。揺り動かされて、今までとは違うところに、聖霊に満たされたところに、立つべき場所を変えさせられたのです。自分自身の業を問い、自分自身の心を問う場所から、神の御業を問い、神の御心を問う場所へと、揺り動かされて行ったのです。

わたしたちが「大胆」なのではありません。神が「大胆」なのです。神が、「大胆」にもわたしたちに御自らの聖霊を満たしてくださり、「大胆」に神の御業を語り、行う器としてくださっているのです。